運命な人

伊藤　佑弥

動機は不純で不純異性交遊は別にそこまでは興味はないのだけれど、運命の人という言葉にはとてつもない興味津々。しんしんと高鳴る心に、ジャジャジャジャジャーンって鳴り響始まりの音。

さあ運命の人探し。でもどこを探したらいいかわからない。困っていると、誰かがやってきて肩を叩かれ、あたし超笑顔。超笑顔で草木は枯れていく。なんでだ。でもその肩たたきの人があたしの運命の人。見つかった。

でも一人。咳もあくびをしても一人。運命の人なんていない。誰もいない。誰もいないのはなんでだ。ああ、悲しい。妄想ではすぐ見つかるのに、現実はSOハード。困る。狂う。どうしよう。なんで運命は存在しないのだろう。

もしかしたら運命なんて、自分よりも近くにあって見つからない青い鳥的なものなのかもしれない。青い花のあたしは、うんうんうんうんと頭が360度回転、空転させながら、思考を施行し実行。エンターキー押しても『運命』は実行されず。思考だけがフル回転。ミニ四駆なら公式大会出場禁止のモーターの回転と同じくらいのスピード。あたしテストより考えている。

ひらめけーひらめけー、

あたしの思考、あばれはっちゃく。ひらめけーひらめけー逆立ちできないけど、ピカンと光るのを待つ。

ピカ！ひらめいた！

思いついたのは千円札にアドレスと一言書いて、コンビニで使う。ただそれだけ。自分のアドレスが人間社会の波に飲まれてさよならバイバイ。瓶に詰めた手紙のように波にさらわれろ。サヨナラバイバイ、僕はこいつと旅に出る－ピカチュー。なんて小唄を囀りたくなる高揚に飲まれながら、千円札は消えた。

さあ、お次は待つだけ。

しばらくお待ちくださいってテロップが出て、あたしは待った。

あたしは待つ女。今日も公園のベンチに座り、永遠と帰らぬ漁師を待つ港の女の気分を味わう。千円札に書い

たアドレスがいまどこにいるのかを待つばかり。どこだろー四国かなあ。東京？かなそれとも北海道はでっかいどー。 なんつて。あー面白くないけど、面白い。笑顔がこぼれてしまう。うふふ、と涎まじりの変な笑い。

「ナヤミさんはなにをしているんですか？」

急に名前を呼ばれてびっくり、涎をじゅるりと拭く。もう運命の人が！なんて思ったけれど、単なる同じ予備校の吉岡くんだった。吉岡くんじゃん！何やってるのー！って心底冷静に言ったら、「いや橘ですけど」って軽く否定。軽くやばいなってあはははと乾いた笑いを見せつける。 もう運命の人以外は見えないのです。残念です。

「どうしたんさー」

誤魔化すため、明るく言ってみる。

「いやナヤミさんがいたから」

oh！急に目がマジだぜ！少年。けれど、あたしは待つ女。港に骨が届くまで、この小さな電波を受信する箱からの連絡を私は待っているの。だから、吉お、いや橘くんごめんよー。

「ナヤミさんはなにやっているんですか？」

確信的に核心にどーん。どうしようかなあ。言おうかなあ。言わないで、なんかカレシがーチョットーアレデーアタシーナンカーアレダカラーみたいに濁すか、いや濁すわけがない（反語）。ここまで思考約２秒。 早い回転。もしかして思考界のボルト？思考界ってなんだよ！まあ真実を言おう。

「運命の人探しをしってんさー」

「運命の人？」

急に犬にアバババババって言ったときみたいに、首を傾げる吉岡じゃない橘。意味わからんのかー、とお腹にロケットパンチをしたかったけれど、あたしの腕は外れない。くそう。しょうがないから、運命の人についてビシバシバシビシ教える。

「運命の人と私は結婚したいの。恋愛なんて単なる気の迷いでしょ？でも運命の人だったら、あれよ、王子様のお姫様。ナイフとフォークみたいに運命共同体！私は共同体になりたいの」

ふー詩のボクシングもびっくりの熱弁だぜ。そしたら橘クン意外に真剣な表情で、なんかあたしの方があれ？と肩透かし。ばかじゃねーのーとか言われると思ったのに。まあ言ったら、首元を鋭利な刃物でスパンズバーギャーだけど。

「僕、ナヤミさんのこと好きですよ」

透き？隙？鋤？スズキ？ススキ？スキー？え？

顎が外れたみたいに口をあんぐり開けていたら、その表情が面白かったのだろう。ドラマで美少年が笑うような微笑を浮かべて橘は続けた。アレ？アタシ橘を美少年って言った？わからないー。

「ナヤミさんが好きです」

「いあいあいあいやいや、私には運命の人が、、、」

ジェットコースターで自分にだけ、安全バーが外れてた時より、心臓がロックンロールを刻んでいる。オイオイオイオイオイ。

「僕が運命の人じゃだめですかね」

「ななななな、なんか橘くんは運命の人的なのないの？」

何を言ってるあたし。あー。飢えたケモノじゃないんだから。何求めてんだか、でも運命な人なのか気になる。気になる。種が生まれて木になる。

「ないかな」

ないのかよ。ないのかよ。ないのかよ。

もう何回でも言う、ないのかよ。な　い　の　か　よ！

「この世界で出会えたってことは運命じゃないんですか？」
はて？
あたし思考停止。思考界のボルトも足を止める。はて？
それはなんだ、怖い話の類？それとも精神論？てか運命ってなに？頭ん中クエッション。ジャジャジャジャーン？
ああ、それはベートベンの交響曲、、あ！頭の中の神様が言う。でもその運命と違う。
「わかんないよ、」
もう泣きそうだよ。天狗のように伸びた鼻を折られた気分だよ。通称ピノキオピンチだよ、今考えたよ。
どうしよう。え、どうしよう。
「運命だよ。人間ってどんくらいいると思います？」
問いを出された！赤点を取ることが特技のあたしにそんな問いなんてわかるはずない。あれか、とんちか。一休さん的なあれか。ぼくぼくちんちんか。ちんちんって！もう！
それともなぞなぞ？じゃあ答えはお風呂？それは下は大火事、上は洪水だ。
人間がどれくらいいるか、、、どんくらい。泣かないで？それはDon,t cryか。答えなきゃ。この問題、進研ゼミでやったところじゃないからできない！！　わからない！志望校にも受からない！
「えっと、５０万？」
「少ないよ、フリーザの戦闘能力ですか」
ツッコミー。突っ込まれたー。さすが男子、ツッコミが上手ね、なんて言わない。やらしい思考はゴミ箱にぽい。でもフリーザは５３万だよ、間違えてるよって言ったら怒られるのかな。怒られるだろうな。
「たくさんいるんですよ、人間」
じゃあ答えは！！！何人いんだよ！おい橘！

「はい」
心を隠しておしとやかに、相槌。新しい私でびゅー。びゅーびゅーん。
ベンチに座る橘クン。意外に距離が近い。
「ねえ」
顔を近づける橘。近いよ。水しぶきが背中にかかる。近いよ。
「ナヤミさんが言う運命の人的なものってなんなんですか？」
え、えー。えー。え、例えばを出さなければいけないってことだよね。うーん。
「えっと、」
「はい」
目をキラキラしながらアタシを見る橘（童貞）いや童貞なのか知らないけど。興味津々か。
「私が襲われたり、した時とか助けてくれたりとか、私が遅刻してたら、ぶつかるとか、、」
「古典的ですね」
「古典だよ！悪いか！！」
「いや悪くないですけど」
「運命信じてんの、そんくらい信じてるの」
「お腹すきません？」
運命は！え？急に？何？
「うん」
うん、話ったし。こんなこと誰にも言ったことなかったし。
「はい、三色パンです」

おおおお。ドラえもんか君は！三色パン食べる。
「ありがと」
「何味がいい？？」
「クリーム」
橘が三色パンをちぎる。どこがクリームかなあ。あんこ嫌いなんだよなあ。
「あ」
「え？」
橘が驚いて、アタシもつられて驚く。
「見て」
三色パンを見せられる。
「おお」
驚く。三色パン全部クリーム味だった。
「え？なんで？」
「運命ですかね、ナヤミさんが好きだから運命が変えたんですよ」
すげー。こいつすげー。
「別に付き合わなくてもいいです。まだ。でも友達でいてください」
照れる。橘はもしかしたらすごい人なんじゃないかって思う。
うーん。うーん。こんな告白されてどうしよう。なんて言おう。なんて言おう。迷い。
「ありがとう」
なんて普遍的な答え。運命とか言ってたのに、アタシ。

「これから探せばいいんですよ」
橘が見透かしたように言った。驚いた。
「、、、うん」
頷いてみた。

運命な人

http://p.booklog.jp/book/41494

著者：伊藤佑弥
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/cm-journey/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/41494

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/41494

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.